# 多文化社会の異文化 「終活」を考える

**木下貴雄（王榮）・舘洞晋也・大島ヴィルジニア･ユミ・ラッフマ･クマラ･デウィ**

2020 年 7 月 11 日（土）に、愛知県立大学生涯発達研究所は、あいち多文化ソーシャルワーカーの会、外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト、多文化ソーシャル・ムーブメント（TSM）と愛知県立大学地域連携センター、多文化共生研究所との共催で、「多文化社会の異文化『終活』を考えるセミナー」を、Zoom ミーティングを利用したオンライン開催で実施した。その内容を以下に掲載する。

〈コーディネーター〉
**木下貴雄（王榮）**氏（あいち多文化ソーシャルワーカーの会）
〈報告者〉
**舘洞晋也**氏（愛知県多文化共生推進室）
**大島ヴィルジニア・ユミ**氏（ブラジリアンコミュニティ通訳サポートの会）
**ラッフマ・クマラ・デウィ**氏（日本インドネシア家族勉強会）
**王榮**氏（あいち多文化ソーシャルワーカーの会）

## 1．セミナーの趣旨

木下　貴雄

あいち多文化ソーシャルワーカーの会の木下と申します。本日は、たくさんのご参加、ありがとうございます。今回、初の試みということで、この異文化「終活」を考えるセミナーを共催で開催させていただくことになりました。私のほうから、簡単に、今回なぜこの異文化「終活」を考えるセミナーを企画したのか、その趣旨について、説明をさせていただきます

専門家の方も多いかもしれませんが、趣旨を説明する前に、まず、なぜ多文化ソーシャルワークに異文化「終活」が必要なのかということを、知識として先に説明させていただきます。「多文化ソーシャルワーク」、まず、「多文化」を取って、「ソーシャルワーク」とは何かについて、社会福祉分野において援助が必要な個人、家族、コミュニティー、困っている人たちに対して、社会福祉の専門家によって行われる援助活動のことです。そして、「多文化」を戻して、「多文化ソーシャルワーク」とは何かです。多様な文化的、社会的背景を持つ外国人に対するソーシャルワークのことが、多文化ソーシャルワークと定義されています。また、多文化ソーシャルワーカーとは、外国人が自国の文化と異なる環境の中で生活することによって生じる心理的あるいは社会的な問題に対して、ソーシャルワークの専門性を生かし、相談から解決まで継続して支援していく人のことです。

これらを踏まえ、多文化ソーシャルワークに異文化「終活」がなぜ必要なのか。いま、日本は終活ブームです。セミナーやイベントなど様々な形で行われています。

外国人の変化について少しお話しさせていただきたいのですが、また、後ほど愛知県からの説明

の中で、多分、詳細なデータが出てくると思いますが、今、外国人の永住化、定住化、多様化が進み、多くの外国人が日本で暮らしています。当初は短い期間で日本での滞在を予定されていた方が、様々な事情で永住、定住され、生活とともに年も重なり、現在高齢化が発生しています。私は、中国帰国者の支援活動を中心にこれまで行ってきました。これまでの支援活動の内容を見てみると、異文化背景を持つ外国人は、労働や就職など様々な事情で来日されていますが、長年日本で生活し、もう今皆さんは一生活者として地域の中で生活されています。

生活する上で様々な問題も生じていて、社会福祉サービスを必要としています。つまり、ライフサイクル、「ゆりかごから墓場まで」という言葉はよく表現として使いますが、人としてのライフサイクルにおいて、全ての外国人が社会福祉サービスを必要とされています。当然、日本人が必要としていることは外国人も同じように必要としているということだと思います。ですから、生活者として社会福祉サービスを必要としているけれども、その提供が十分にされていない。そのために、外国人の方が十分に福祉サービスを受けられていないという側面があります。

またサービスを提供するという概念において、サービスを提供する側が、外国人住民の文化的背景や習慣、価値観といったことをまだ十分に理解していない、あるいは理解しようとしていないというのが、残念ながら、これほど日本に外国人が増えているにも関わらず、まだ発生しています。つまり、それがどういうことかというと、私の感覚で言わせていただくと、ライフサイクルの中の必要とされているパーツ、パーツの支援が行われてきたんですけれども、これまでに、生まれる、学ぶ、働く、子どもを育てる、共に祈るというところまでは、不十分ながらも何らかの形で行われてきてはいるかなと思います。

ただ、外国人の老後、そして、終活についてはこれからだと思います。これからは異文化「終活」がやはり必要になってきます。永住化、定住化に伴って、外国人の高齢化も進行し、当然日本で最期まで生活していくために、人生の最期を日本で迎えていく方が今後さらに増えていくことが予測されています。

異文化「終活」を狭い意味で考えると、世間でブームになっている終活という意味と大きく変わりませんが、外国人の高齢化に伴い、外国人の高齢者たちが日本でどう老後を生活していくのか、それによって人生最期の締めくくりが非常に大事になってくると思います。これは日本人だけではなく、人としてすごく大事なことですが、ただ日本人と異なる部分においては、外国人が高齢になってくると言葉（母語）というのはすごく大事になってきますし、さらに、文化、宗教、習慣、風習、価値観といったものが異なっているため、人生の締めくくりにおいては、この異文化「終活」というのは、いろいろな意味合いで難しい部分が存在しています。ですから、異文化「終活」おいては、異文化背景を持つ方々が自分らしく納得のいく締めくくりができるように、今後こういったサポート、支援が必要になってくると思います。

それでは、異文化「終活」とは何か、という疑問が出てくると思いますが、残念ながら今のところ、このセミナーが異文化「終活」を取り上げる初の試みなので、まだ異文化「終活」という概念がない中において、広義で考えると、単に今の日本でブームになっている「終活」という意味だけではなく、やはり先ほど申し上げたように、これから皆さん（外国人高齢者）が日本での老後生活をどう設計していくのか、つまり、老後における生活設計のことです。今高齢になっている人、あるいはこれから高齢になっていく人が、これから自分たちが老いていく中で、きちんと自分のライフプラン、生活設計ができるかどうかによって、老後の生活の質が大きく変わってくると思います。

以上のような意味で、先ほどお話した狭い意味での異文化「終活」、つまり介護、ターミナルケア、看取り、葬儀、お墓なども含めて、老後生活をきちんと自分で考えて、自分らしく最期を迎えていくこと、老後の生活を経て、そして、人生の最後

の「終活」によって自分の人生を締めくくっていくことが異文化「終活」ではないかと、今のところは定義しています。今後、様々な角度、アプローチからこういった意味合いを修正していくことも必要だとは思いますが、現時点では異文化「終活」をこのように考えています。

そうとはいえ、いきなり外国人の異文化「終活」を進めていくにも、非常に多くの問題が潜んでいることが考えられます。そもそも論になってしまいますが、これだけ周りに外国人がいますが、例えば自国や出身地での終活がどのようになっているのか、習慣や考え方がどうなっているのか、あるいは実際に日本ではどうされているのかについて、私を含め知らない方がおそらく多いのではないかと思います。

そこでまず、習慣や考え方、背景を知ることからスタートしていかないと、なかなか次に進まないと考えまして、様々な異文化背景を持つ方たちに自国の「終活」について少し話していただき、我々がそれを知っていく今回のセミナーを「ステップ 1」としたいと思います。さらに、これを踏まえて、逆に皆さん（在住外国人）が日本での「終活」に関して感じている不安や戸惑い、あるいは困っていることを我々が聞いて、それを解決するためにはどうしたらいいのかを考えていくのが「ステップ 2」です。聞いて、考えるだけで終わってしまったら意味がないので、「ステップ 3」として行動に繋げていく、適切なサポート、支援ができるようにアクションを起こす、ということが、この異文化「終活」を考えるセミナーの趣旨、考え方です。

できればステップ 1、2、3 をシリーズ化したいと考えていて、今後いろいろな外国人に出ていただき、話をしていただいて、最後にトータルで支援を考えていくようなことに繋げていけたらいいなと思っている次第です。本日のセミナーの趣旨というのは、まず「知る」ことです。そして今後、さらにいろいろなことを聞き、考え、次に繋げていくことが、このセミナー全体の趣旨でございます。

## 2. 愛知県における外国人の「終活」に関する取組について

舘洞　晋也

愛知県多文化共生推進室の舘洞です。私からは、愛知県における多文化共生について、また、今回のテーマであります外国人の異文化「終活」に関連した県の取り組みについてお話をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

### （1）愛知県の在留外国人の状況

こちら（図 1）は、国籍別の在留外国人数を棒グラフで、総人口に占める外国人県民の割合を折れ線グラフで示しています。在留外国人数は、2008 年まではブラジル人を中心に右肩上がりに増え、約 22 万 8 千人にまで増加しました。その後、リーマンショックなどの景気後退により、在留外国人数は減少に転じ、2012 年には一旦 20 万人を割り込み、約 19 万 6 千人となったものの、2013 年からは再び増加に転じ、最新の 2019 年 12 月末現在では 28 万 1 千人と過去最高となっています。増加に転じた以降は、とりわけフィリピン、ベトナムといったアジアの人たちが増加し続けており、一層の多国籍化が進んでいる状況であります。

国籍別に見てみますと、2019 年 12 月末の統計データは国籍別が判明していないので、その半年前の 6 月末のデータで説明します。本県で一番多いのはブラジル人で、約 6 万 1 千人、次に多い中国人が約 5 万人、そして先ほど増加傾向と説明をしましたフィリピン人が約 3 万 8 千人、ベトナム人が 3 万 7 千人、韓国、朝鮮人の 3 万 2 千人となっています。

続きまして、愛知県の外国人県民の状況を、在留資格別に経年の推移（図 2）を見ていきたいと思います。折れ線グラフの四角の点で示されている永住者は、毎年増え続けていることが分かります。皆様ご存じのとおり、永住者資格は入国と同時に得られるものではなく、10 年以上日本に在留して素行が善良である、という永住許可の条件を満たす必要があります。右肩上がりである

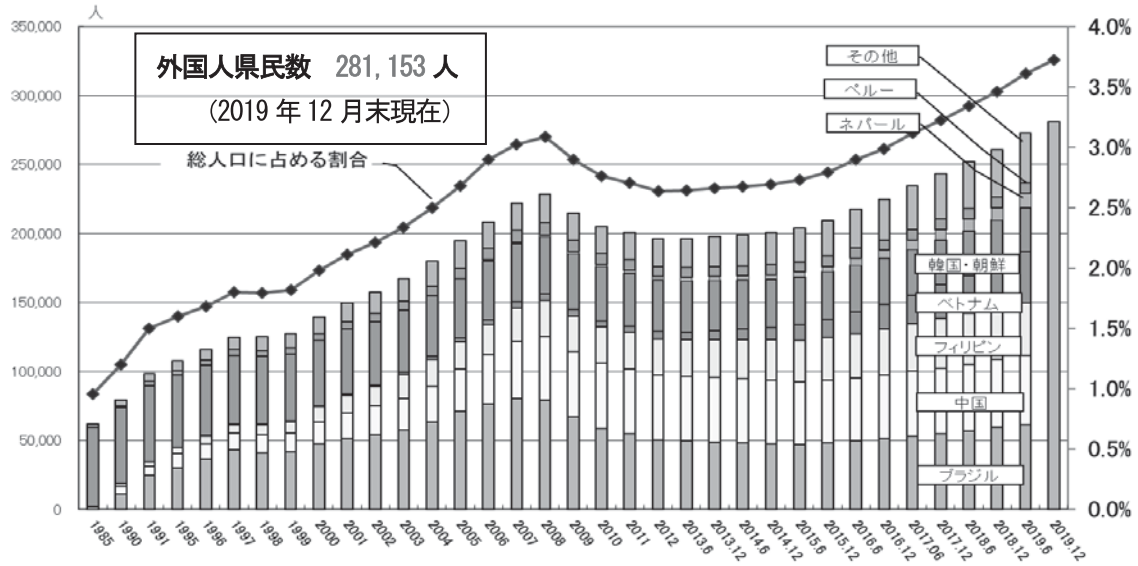


図 1　愛知県の在留外国人数の推移

出典：法務省『在留外国人統計』（2012 年まで各年 12 月末現在）

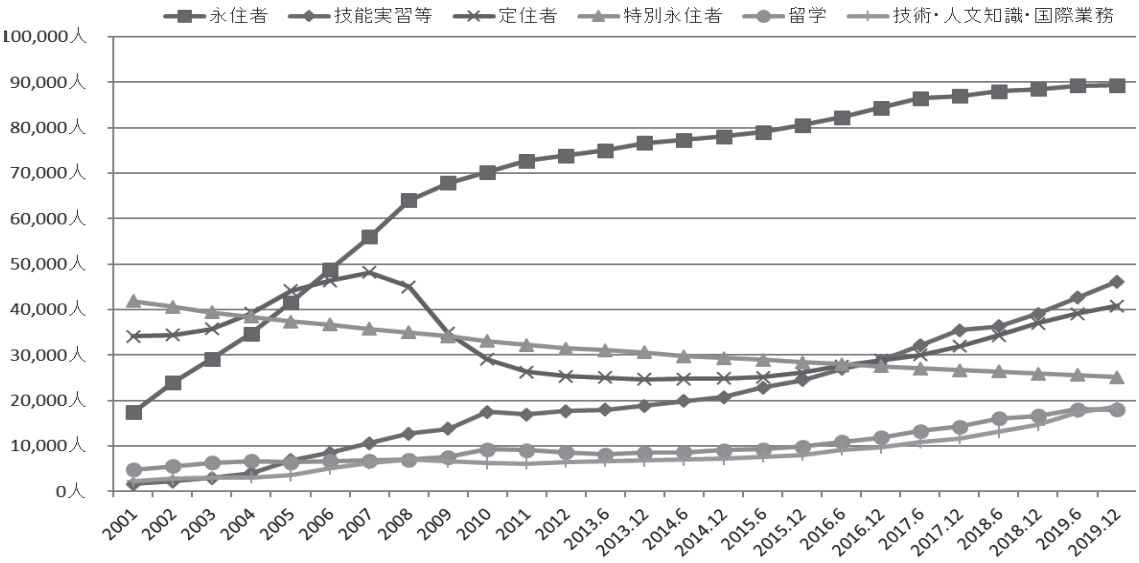


図 2　在留資格別外国人数の推移

出典：法務省『在留外国人統計』（2012 年まで各年 12 月末現在）

ことは当たり前ですが、この地域には永住者資格によって長く住む外国人が多いということが分かると思います。一方、2001 年の時点でトップだった特別永住者は、主に韓国、朝鮮の方々です。2001 年に約 4 万人であった特別永住者は年々減少し続け、2019 年 6 月末現在で約 2 万 5 千人となっており、高齢化が影響しているものと推測されます。

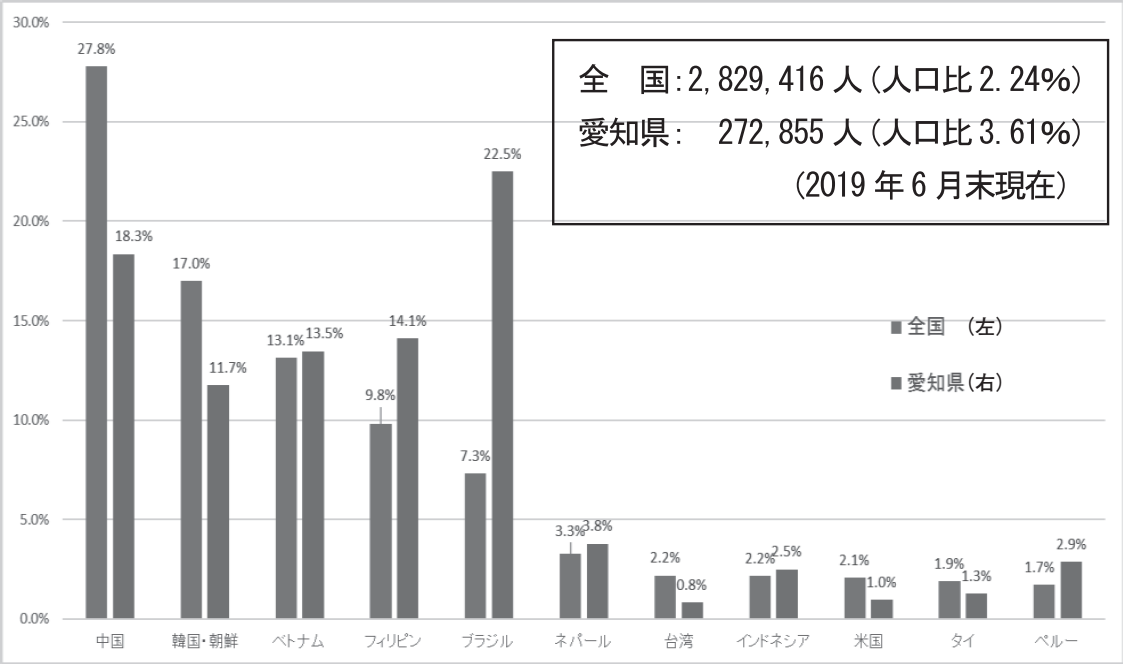


図 3　在留外国人の国籍別割合比較

### （2）全国と愛知県の在留外国人の比較

こちらの棒グラフ（図 3）は、在留外国人の国籍別の割合を示しています。国籍ごとに、左が全国、右が愛知県の割合となっています。愛知県の特徴としては、ブラジル人の割合が全国の 7.3％の 3 倍、22.5％と非常に高くなっています。全国でブラジル人住民が一番多いのが愛知県で、全国のブラジル人の約 3 割が愛知県に居住しています。それ以外の国については、フィリピン、ベトナム、ペルーといった国が全国と比べて高くなっています。これは、就労を目的として、1990 年代のバブル経済前後に入国した日系ブラジル人やフィリピン人が愛知県に多いことに起因するものです。

### （3）外国人の入国時期

こうしたいろいろな国の方がこの地域に住んでいらっしゃいますが､入国された時期は様々です。まず、戦前から、当時日本の植民地であった朝鮮半島からの移民である、特別永住者である韓国、朝鮮人の方がいらっしゃいます。その後、1980 年代には中国帰国者、いわゆる中国残留孤児の日本への帰国が増えたことや、好調な経済状況を受けて、フィリピンやイランなどのアジア諸国から就労目的での入国が増えました。さらに、1990 年の入管法の改正により日系人を対象とした定住者資格が新たに追加されたことから、1990 年代には日系ブラジル人の入国が増え、特に製造業を中心とした就労の担い手として愛知県に定住、永住する日系ブラジル人が増加しました｡現在では、留学や技能実習生として、中国やアジアなど様々な国の方々が増えています。

### （4）愛知県の在留外国人の人口構成

次に、愛知県の在留外国人の人口ピラミッドで国籍別の年齢構成を見ていきたいと思います。これ（図 4）は、日本の人口ピラミッドを示していますが、高齢化社会、人口減少社会が急速に進んでいる我が国では、男女ともに 60 代と 40 代あたりが山となった釣鐘型になっていることが分かると思います。一方で、愛知県の在留外国人の人口ピラミッド（図 5）は、20 代後半から 30 代前半

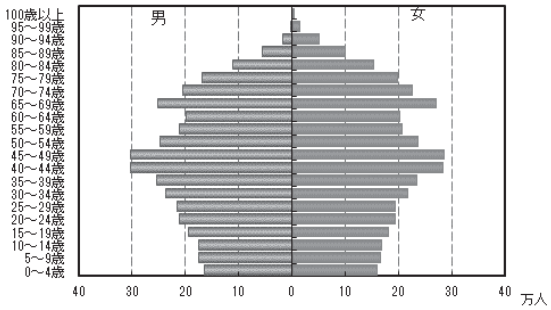


図 4　愛知県の日本人全体の人口ピラミッド

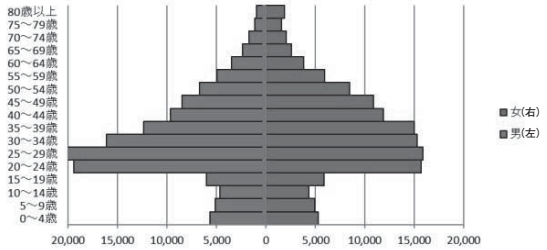


図 5　愛知県の在留外国人の人口ピラミッド

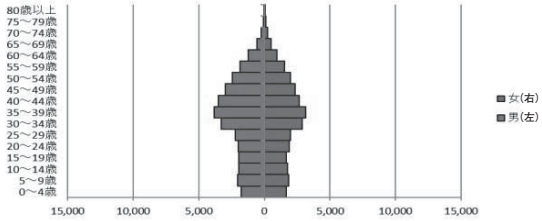


図 6　愛知県の在留ブラジル人の人口ピラミッド

の働き盛りの世代あたりが山となっていることからも、就労目的であることがうかがえます。

国別では、ブラジル人はろうそく型のようになっています（図 6）。ただ、50 代も増えておりますし、韓国人（図 7）では、45 歳以上が多くなっていることからも、高齢化が進んでいることがうかがえるかと思います。また、フィリピン人（図 8）は、男性よりも女性の人数が多く、接客業で働いていた方が日本人男性と結婚をして、この地域に定着していることが分かると思います。

愛知県の 60 歳以上のブラジル人の割合の推移（図 9）を見てみますと、年々その割合が増加し

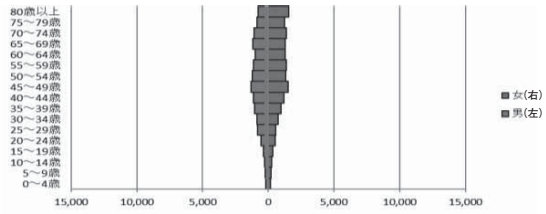


図 7　愛知県の在留韓国人の人口ピラミッド

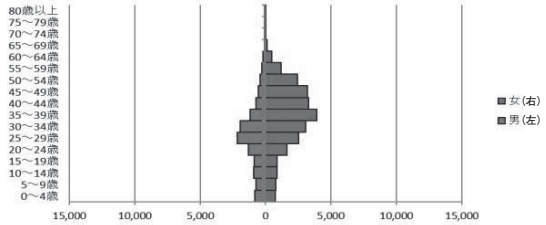


図 8　愛知県の在留フィリピン人の人口ピラミッド

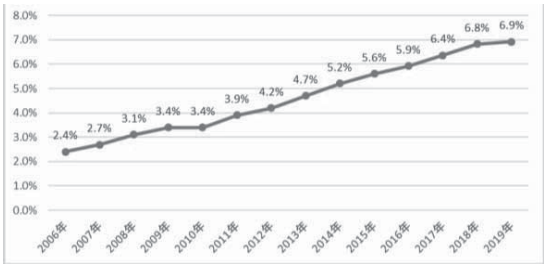


図 9　愛知県のブラジル人の 60 歳以上の割合

ていることが見て取れます。やはりこれらのデータを見ていただくと、外国人県民全体の高齢化率は日本人県民に比べるとまだまだ低い状況にはあるものの、着実に高齢化が進んでおり、介護などの面で、外国人への対策に早急に取り組まなければならないと感じているところです。

### （5）あいち多文化共生推進プラン

愛知県は、2008 年 3 月に、外国人をゲストではなく、共に暮らし地域をつくっていく生活者として、様々な施策を体系的に展開するための「あいち多文化共生推進プラン」を策定しました。その後、2013 年には、「あいち多文化共生推進プラン 2013－2017」を策定し、生活全般にわたる更なる支援の充実を図るとともに、外国人県民も地

域の担い手として活躍できる社会に向けて取り組んできたところです。

そして、教育・労働などの継続課題、第1世代と呼ばれる1989年の入管法の改正によって創設された定住者資格などにより就労目的で来日した方の高齢化、あるいはその第1世代の子どもで日本で育った第2世代の活躍など、新たな課題が出てきました。そこでこれらの課題に対応するため、2018年3月に新しく「あいち多文化共生推進プラン2020」を策定したところであります。

このプランでは、永住化の進展などに伴う新たな課題に対応するために、つながりをベースに、3つの施策目標を掲げています。1つ目は、「ライフサイクルに応じた継続的な支援」として、支援のつながりを目指すことです。2つ目は、「互いに支え合う共生関係づくり」として、人と人とのつながりを目指すことです。最後、3つ目が、「外国人県民とともに暮らす地域への支援」として外国人と地域とのつながりを目指すということで、この3つの施策目標を掲げて進めているところです。

この施策目標で一番特徴的なものは、1つ目、「ライフサイクルに応じた継続的な支援」です。近年、あらゆる年代の外国人が増え、定住化、永住化が進み、日本に住む期間も長くなりますと、課題も出産から高齢期まで多岐にわたります。そこで、それぞれの施策を個々に考えるのではなく、乳幼児期から子ども、青年、成人、そして老年期まで、各ステージに合わせて福祉や医療、教育や防災など、ライフサイクル全般を見渡した継続的な支援を行っていこうというものです。

多文化共生プランにおける継続的な支援を一覧にしたライフサイクル図によって、一体何が必要なのか、どの時期にどのような支援が必要で、それに対してどのように取り組んでいくのか、取り組めているのか、あるいは取り組めていないのか、ということが、図にして見える化をすることによって、よく分かります。ライフサイクル図において、今回のテーマである異文化「終活」を考えるということに関連した部分としては、成人期から老年期にかけての生活支援の充実です。生活設計への支援、終活への対応支援、年金加入の促進、それから老年期における高齢化の対応、こういった取り組みを進めていきたいと考えています。

### （6）外国人向け生活設計支援冊子

生活支援の充実に係る取り組みとして、昨年度、外国人向けの生活設計支援冊子として、『知って安心！　あなたの未来とお金のまるっとガイドブック』を作成しました。日本で長く生活する外国人県民の中には、住居、教育、老後など、日本の制度に関する情報の不足によって生活設計が立てられず、不安を抱えている人が少なくありません。そこで、外国人県民の方が日本で安定した生活を続けられるよう、子どもの進学や住宅購入、退職後を見据えたライフプランの設計、社会保険に加入することの大切さなどを伝える冊子を、日本語を含めた7言語で作成しました。

本日は、その内容を全部紹介することはできませんが、愛知県多文化共生推進室のあいち多文化共生ネットのホームページに掲載していますので、ご覧になっていただければと思います。本日はその一部をお見せしながら説明できたらと思っております。この冊子では、人生全体の生活を考えて立てるライフプランに合わせて、これから人生で経験するであろう出産、子どもの教育、住宅の取得、老後の生活、介護サービスの利用、亡くなったときの葬儀・相続などについて、それぞれのイベント、行事ごとにどのくらいの費用が必要なのか、そのための制度にはどういったものがあるのかなどについて紹介をしています。例えば、今回は「亡くなったとき」をピックアップしてみました。葬儀には、どのような葬儀の仕方、種類があって、そのために必要な書類には何があるのか、どのように手続きすればよいのか、また、亡くなった際に相続が当然かかってきますが、この相続をどのような形で整理していくのか、その手続きには何が必要なのか、といったことを、この冊子を見た外国人の方が理解しやすい内容で紹介をしています。

この内容を外国人に周知するためには、まず、

支援者を通じた丁寧な情報提供が必要だと考えました。ライフプランと言われて、しっかり考えているかといわれると、お金はあったほうがいいかな、貯金はしておくべきだ、というぐらいでしか私も考えていません。人生設計というものは、なかなか考えられないと思います。それをいきなり外国人の方に、どうぞこれを見て考えてください、と言ってもなかなか分かるものではないと思うので、まずは支援者の方にこちらの理解をしていただいて、そのあとこれらの情報を外国人の方に提供するという流れが一番よいと考えました。そこで、この冊子作成後、昨年は名古屋市と岡崎市で外国人支援者向けのライフプラン研修会を行い、支援者の方にもライフプランを立てることの大切さ、外国人県民が知っておくべき制度、相談窓口などについて理解していただきました。今後もこの冊子を活用して、外国人県民の方々に対して、自身の生活設計や社会保険制度の理解促進などの情報提供を行っていきたいと考えています。

### （7）外国人高齢者支援事業

次に、高齢化への対応に係る取り組みとして、今年度「外国人高齢者支援事業」を実施します。この事業は、介護や社会保障制度といった高齢化に伴う諸課題について県内外国人高齢者の実態を調査するとともに、外国人高齢者の支援を行う際に活用できるリーフレットを作成し、介護支援者の多文化共生への理解促進を図っていくものです。具体的には、これまでに外国人高齢者介護などにおいて先進的な取り組みを行っている団体または個人を対象に、困り事やその解決方法、独自の取り組み、行政に求めることなどをヒアリングし、その調査結果を報告書にまとめることとしています。

また、介護認定調査員やケアマネジャーなどの支援者が、外国人高齢者の様々な歴史的背景、生活習慣、信仰宗教などの多文化共生に関する知識を持った上で外国人高齢者を支援していただくことができるように、介護支援者向けの多文化共生理解促進リーフレットを作成するとともに、介護支援者が外国人高齢者に対して介護認定調査や介護制度の説明において、専門用語や介護認定の流れなどを説明する際に活用できる制度説明リーフレットを多言語で作成し、介護等の現場で活用して頂けるようにしたいと思っています。

多文化共生推進室としては、この事業の調査結果や、事業を進めていく中で意見交換などによって得られた介護現場の実態や課題、行政に対する要望などを踏まえて、関係局と調整をしながら、外国人県民の高齢化に関するプロジェクトチームを立ち上げて、効果的な施策を打ち出していきたいと考えています。

### （8）多文化共生推進室の活動と今後

多文化共生推進室には、ホームページ、紹介した生活支援冊子などの情報、またフェイスブックもあり、県の取り組みなどを紹介しています。ご覧頂ければ、県の多文化共生に関する取り組みなどが見て取れるか思いますので、どうぞご覧になっていただければと思います。

最後に、本日説明をさせていただきました終活に関連した高齢化への対応については、「あいち多文化共生プラン 2022」で初めて明文化をしたものです。今後、外国人の高齢化への対応について、一歩ずつ着実に取り組みを進めていきたいと考えているところです。

## 3. 在日外国人の「終活」事情

### （1）ブラジルの場合

大島ヴィルジニア・ユミ

#### ①移民である家族の紹介と自己紹介

今日のテーマですが、資料を作りながら実は私もとても興味深いテーマだと思っていました。私の母親が 3 年前に亡くなったので、少し感動しながら、母のことを思いながら、これももしかして何かの理由で話がきているのかもしれないと思っています。今日の「終活」というテーマは、私たちニューカマーと言われるブラジル人は、実はま

だまだあまり意識していないテーマです。なぜかというと、例えば私は、30年ほど前に来日しましたが、そのときはまだ20代で終活のことは全く考えていなかった時代です。私のお父さん、お母さんもまだ40代後半や50代で若かったですが、残念ながら、母がブラジルで亡くなりました。亡くなったのは突然だったので、私はお葬式に行くことができませんでした。

そういったことも踏まえて、違う国に移民する、日本には移民政策はありませんが、移民して違う国に働きに行くということは、楽しいイベント、例えば親戚のお子さんが生まれたり、親戚や家族の結婚式にはもちろんなかなか参加できません。当然、突然亡くなったお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんのお葬式にも行けないことはとても悲しいです。私たちはしようがないと思っていますが、時間が経っていくことで深く考えることになります。これは娘が1歳のときの写真です。今はもう26歳になります。

あいち多文化ソーシャルワーカーの講座も、木下さんと一緒に勉強しました。犬山市役所でも仕事をしていますが、今日は個人的にブラジリアン通訳サポートの会の代表として参加しています。

私の母の母であるおばあちゃんは、日本生まれで、ブラジルに移民した日本人です。多分80年ほど前にブラジルに移民して、日本人としてブラジルで亡くなりました。逆のパターンです。私の日本人のおばあちゃんはブラジルで終活をしたということです。私の父の父であるおじいちゃんは富山県の魚津市の出身で、ブラジルで亡くなりました。父の母であるおばあちゃんは大阪出身で、まだブラジルで生きています。今年100歳になりました。80年近くブラジルで過ごし、多分終活はブラジルで過ごすと思います。祖母はちょうど20歳のときにブラジルに渡りました。きっと、ずっと日本人としてブラジルで亡くなっていきます。私もあまり今のところ終活のことを考えたくはありませんが、今度逆に私はブラジル人として、日本で終活をする可能性があると思います。

先ほどから移民と言っていますが、明治時代に日本にはとても大変な時期がありました。経済的にすごく困っていて、当時の生活保護とも言われるように、ブラジルに移民しました。ペルーやハワイなどあちこちに移民しましたが、ブラジルにも移民しました。

ここからブラジルの話をしていきたいと思います。皆さん、この写真を見ていただくと、赤ちゃんから大人、女性の方、男性の方、多国籍のように思いませんか。実は違います。全員、国籍はブラジルです。ブラジル人です。白人の方もいたり、黒人の方もいたり、私たちみたいな日系人、アジア系の方もいます。何が言いたいかといいますと、ブラジル人という人はなかなかいなくて、オーストラリアなど発見されたときにもいろいろな国の移民がいたと思います。多分、ひいおじいちゃんやひいおばあちゃんのルーツも様々な国からきていると思いますが、ブラジルに行くとこのような感じです。誰々さんは金髪、黒人とすると、もしかして外国人ですよねといえるコンセプトはないです。もちろん文化も大きく異なります。

私の簡単なプロフィールを紹介します。私はブラジル生まれ、ブラジル育ちで、パラナ州というところから来ました。日本に来て、いろいろな仕事をしました。もちろん最初は、日本語がほとんど分からなかったので、日本に出稼ぎ労働者として働きに来て、数年、工場で2、3年働いて、お金をたくさん稼いで、またブラジルに帰れると思っていました。その中で、日本で子どもが生まれました。私の子どもは日本生まれ、日本育ちですが、国籍はブラジルです。

私は、いろいろなところで仕事をしてきました。医療通訳や市役所、派遣会社などで通訳をして、その後、個人的な活動、楽しい活動や、私たちがやりたい活動など楽しい活動、あるいはそんなにやりたくはないけれど必要な活動をしてきました。コミュニティーの中では、成功している人がたくさんいます。本当に嬉しく思いますが、日本初の出稼ぎ移民のブラジルの弁護士さんがいたり、もうすぐお医者さんも誕生するということで、成功者の方もたくさんいますが、残念ながら、ま

だ多くの方は食べ物がない、あるいは食糧支援してほしい、生活保護に入らないといけない、ということが多いので、その中で活動しています。

この写真は、犬山市役所で相談をしている相談室の様子です。次の写真と、その次の写真は、私たちの活動であるブラジリアン通訳コミュニティー、ブラジリアン通訳者サポートの会、ブラジリアン翻訳者協議会、ちょっと名前が異なりますが、それぞれ目的が少し違っていて、これから私がお話していくことは、これらの活動、仕事の相談の内容や、感じたことについてです。

### ②ブラジルについて

皆さん、ブラジルはとても広い国です。ご覧の通り、時差も4つほどあります。私が住んでいたのはパラナ州のクリチバ市です。サンパウロ州はその中に、日本がまるっと入る大きさです。ブラジルの面積だけでいうと、日本の23倍あります。ただ、人口は約2億人なので、日本に比べると人口密度はそれほど高くありません。何を言いたいかというと、ブラジルはものすごく大きな国で、ヨーロッパの方からは、ブラジルはもう大陸ですよ、国と考えないほうがいい、と言われます。確かに、ヨーロッパ全体で、やっとブラジルの大きさに近づくので、それを考えると、ヨーロッパにもいろいろな国があり、ものすごくいろいろな文化、宗教、価値観が違う中で、ブラジルも同じように、ヨーロッパのようであると思ったほうが、多分皆さんイメージしやすいと思います。私が話していることは、ブラジルの南部の日系人の文化もいっぱい入っているところのことなので、もしかすると北部の方は、私が言っていることは、えっ、何？と思うかもしれないと、皆さん思っていてください。人口は約2億人なので、私のような日系ブラジル人の子孫は結構多いです。150万人いますが、ブラジル全体ではたった1%です。

宗教は、カトリック教が最も多いですが、年々やはり少なくなっています。カトリック教もイエス・キリスト様ですが、プロテスタント教がとても多くなってきています。各年、10年毎のデータを見ると、また増えていることがわかります。カトリックからプロテスタント、同じイエス・キリスト様を信じていますが、いろいろなことが違います。違いを言い始めると止まらないですが、特にブラジルは、世界にあるプロテスタントのプレスビテリアンや、ルーテル教など、有名なプロテスタント教ではなく、ブラジルで誕生したペンテコステ派が多いです。無宗教も毎年多くなってきています。浸礼派は、徐々に若い人たちに増えています。この浸礼派は、例えば人間が死んだら、また次、来世も必ずあるということを信じています。どちらかというと、カトリック教は、人生は1度しかないと信じています。いつか復活するけれど、復活したら天国にイエス様、神様と一緒に住む、もちろん善い行いをしていたらです。悪いことしかしていないと地獄に行きますよ、という教えが多いです。浸礼派は、前世も来世もあると信じています。

3.2%のその他には、まだ少ないですが、仏教が多いです。20万人以上いて、日系人の20%ぐらいは仏教を信じています。日本でも結構多いと思いますが、ブラジルで最も多いのは創価学会です。あとは、浄土真宗です。面白い話で、ブラジルでも西本願寺と東本願寺に分かれていて、日本の文化がご先祖さまに伝わっています。あとは、生長の家が結構有名で、多分日本から伝わっていて、日系人が作っています。全ての宗教は多分いい教えですが、生長の家の教えもよく、日系人ではないブラジル人もよく参加しています。その仏教の中で、私のお母さんが時々行っていたのは、霊友会です。日本では多分、インナートリップセンターというところで、東京にあって、有名かもしれませんが、仏教の教えです。

それでは、先ほど言ったように、ブラジル人はどうですか、ということになると思います。同じブラジル人でも、日系ブラジル人であればブラジルで洗礼を受けることがあります。私は15歳のときにクリスチャンの洗礼を受けたので、イエス・キリストを信じていますが、仏教もすごく尊敬しています。家には簡単な仏壇があり、遺影もあっ

て、お花をあげたり、線香をあげたりしていて、本当に中途半端なんですね。それほど聖書を一生懸命読んだり、お経を一生懸命唱えたりということはありませんが、様々な文化が混ざっています。そして、浸礼派の前世もあって来世もあるということも信じているので、終活のことを考えるとどうなのかと自分でも思います。

### ③ブラジルの高齢者と介護サービス

最近、ブラジルでも高齢者を大事にしましょうとされています。もちろん、ブラジル人は高齢者をすごく大事にしていますが、残念ながらブラジルでも虐待はあります。高齢者コールセンターもあり、日本のような介護サービスもとても増えています。私がいた時代には、そのような話も、そういったサービス業もありませんでした。それは、私のお父さんやお母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、そして私もそうですが、施設より自分の家、自分の家族と最期を過ごしたいという気持ちがあるからだと思います。世界中どこでも同じだと思いますが、ブラジルでは、一時的に施設に預けるということは、お父さん、お母さんをもう愛していない、愛されていないからここに来た、というイメージが強いです。今でも日本に住んでいるブラジル人やペルー人やラテン人は、施設というと少し抵抗がある方が多いです。

ただ、現在のブラジルは違っていて、介護施設や介護サービスの宣伝もたくさんあります。デイサービスを意味する Centro-Dia（セントロ・ジア）という言葉が、ブラジルにはとてもたくさんあります。私がいたときには、デイサービス、セントロ・ジアはありませんでした。きっと長い間ブラジルに帰っていない方は、このことを知らないと思います。

私の父がブラジルに住んでいた 2014 年に、私と娘で純心という、日本でいう尼さん、シスターさん、カトリック系が経営している、学校とデイサービスが一緒になっているところへ行きました。日系人以外も行けますが、主に日系人がここには通っています。ブラジルの日本移民は 120 名近くになっていますが、70～100 年以上前にブラジルに移民した方の中には、70 年経ってもポルトガル語を話せない人がいます。そうすると、ブラジルでの終活もやはり日本式で、日本語を話し日系人と過ごしたいという方がまだとても多いので、このような純心のデイサービスがたくさんあります。この写真では、日本人の尼さんが、レクリエーションをしています。ここでは、運動会も幼稚園や学校と一緒にやっています。

次の写真は、日系人ではなく、一般のブラジル人のデイサービスです。高齢者のデイサービス、セントロ・ジアです。次はブラジルのデイサービスですが、ここは面白い言葉で「高齢者の保育園」とテレビ番組で最近紹介されています。高齢者デイサービスというと、ブラジル人にはそれほど知られていないので、保育園みたいなところですよ、とかわいく紹介しています。

今度は、葬式の話です。ここは、私の母が葬式を行った教会です。姉がここを選びましたが、家族みんなで、風船を飛ばしてすごくきれいに別れをすることがいいと思って選んだようです。ブラジルでは、新しく、最近はやっていますが、日本のように火葬してくれるところもあります。私の母も火葬しました。日本には四角い箱の中に遺骨を入れるものがあると思いますが、ブラジルではこのまま渡されるので、壊れやすく大変です。同じ葬儀屋さんのサービスとして、遺骨を埋めるのではなく、このようにきれいに保管してお祈りしたりすることができ、最近はやっています。葬儀にはブラジルでは十字架が多いです。花はあまり日本と変わりませんが、十字架とイエス・キリスト様の写真があります。

ただし、ブラジルは本当に貧富の差が激しすぎるため、お金がない方もたくさんいます。これらの写真はインターネットから持ってきましたが、ここは外から見るとすごくきれいな教会ですが、中ではとてもシンプルで、あまり花も持って来ませんし、十字架もありませんが、ご家族や地域の方が葬式や通夜をしたりしています。喪服、黒い服は着ません。暑い時期は、T シャツやジーパン、

スニーカーです。服装についてリスペクトがないと時々言われますが、そうではなく、本当にリスペクトしていて、それは文化や価値観といったものが少し違うのかもしれません。日本で、ブラジルのお葬式、ラテン人のお葬式がこのようであっても、皆さん、悪く思わないでください。リスペクトがないということではないです。

貧しくて、教会にも連れていけない、葬儀屋さんも雇えない方は、自分たちのお家でやっていますが、普通のことです。ブラジルでは、貧困、低所得者は市役所に行き、福祉相談センターに相談すると、もちろん低所得者という証明はないといけないけれど、それを証明できたら、手続きをすれば全て無料でできます。非常にシンプルなものになりますが、提携している葬儀屋さんを雇うことができます。

この写真は、クリチバ市にある公的な霊園です。十字架が結構目立ちますがお墓がすごく異なっています。無料で埋葬はできますが、その後、家族に少しお金ができたら、少しずつ作っていくことが普通です。レンガでもタイルでもよく、それぞれの経済的な状況によって作っていきます。この写真は、非常に高価な民間の霊園です。ここはクリチバ市で一番高いところですが、お墓はなく、きれいに管理されていますが、値段は非常に高いです。日本円で30万から70万円なので、ピンからキリです。

次の写真は、同じクリチバ市にある教会です。ブラジルのカトリック教会などはすごくきれいです。ここでは無料でお葬式もできます。プロテスタントは10分の1をきっちり信者さんに請求し、そのような説得をするので、とてもきれいな教会も建てられています。私がすんでいたところにはモスクもあります。他には、浄土真宗の西本願寺の寺もあるので、ブラジル人は必ずクリスチャン、あるいは日系人は必ず仏教ということではありません。日本に住んでいらっしゃるブラジル人やペルー人は、生まれ育った環境が全く異なるので、今後どうしていけばいいかが1つの課題となります。どうしてかというと、日本で亡くなるブラジル人やペルー人が毎年増えています。先ほど愛知県の舘洞補佐も話されていたように、人生設計もあまりしていない方が多いので、突然亡くなり葬儀屋さんが来たときに、言葉があまり分からず、コミュニケーションもうまくとれないと、これもいいですか、あれもいいですかと言われて、はいはいと答えて、結構高い葬儀になってしまうことがあります。クリスチャンなのにお寺のお坊さんが来てしまったり、お経をあげてもらっていても何をしているか意味が分からなかったり、ということになってしまいます。それでも、お金が発生してしまいます。ブラジル人であれば必ずキリスト教ということではないので、日系人式でやりたいという場合には、細かい相談が必要になってくると思います。私たちのところに、日本でお父さんやお母さんのお葬式をするのに、60万、70万円になってしまったのでどうしましょう、という相談がきます。しっかりと話をすると、シンプルなものを20万円ほどでできた可能性もあったこともあります。ペルーの方の場合には、埋めるのではなくて、海に遺骨を撒いてほしいということが結構あります。あるいは遺骨をブラジルやペルーに持って行って、お父さんやお母さんの故郷に埋めてほしいということもあります。遺骨を海に撒くには、いろいろな手順や手続きが必要ですが、多分そこまでは守られていなくて、勝手に行ってちょっと海に撒いているという話も聞きます。そのことについてきちんと自分の意思を尊重して相談できる異文化を理解してくれるところがあるといいと思います。

## （2）インドネシアの場合

ラッフマ・クマラ・デウィ

### ①自己紹介

私は、インドネシアから来たデウィと申します。フルネームは、ラッフマ・クマラ・デウィですが、デウィと呼んでください。今回私は、自分の終活を考えてお話をしたいと思います。私は、1996年の10月に日本に来て、今年で24年目になりま

す。大島さんと同じで、そのとき18歳だったので、死について考えることは全くなく、日本は楽しいとしか感じませんでした。大学生として来日したんですが、留学生として、留学を終えて、主人と結婚しました。ずっと日本に住み、6年前に名古屋に来ましたが、名古屋に来てからは何度か他の人の死をみる機会があり、とても感慨深いなと終活を考えるようになりました。先程申し上げたように、私は留学生として来て、主人と出会って、主人は日本人で、名古屋出身です。子どもは6人います。一番上が大学に入ったばかりで、一番下は双子で、今年年中になりました。日本では、大人数の家族は多分あまりいないので、この構成は珍しいかもしれません。その上、片親が外国人なので、普通の人と違うところがいろいろあると思います。今日はそのことについて話したいと思います。先ほどの大島さんの話がとても興味深く、ブラジルの終活はとても日本らしくてすごいなと思いましたが、私は主に日本でのインドネシア人としてお話ししたいと思います。

### ②インドネシアにおける宗教

まず、インドネシア人の事情についてお話しします。インドネシアについては、ご存じだと思いますが、インドネシアでは、国柄、1つの宗教に属さないといけないというルールがあります。そのため、無宗教で生きていきますということはできないんです。1つの宗教に属さないといけません。しかも、17歳になると市民カードというものを発行しますが、名前、誕生日などの一番最後に宗教が書いてあります。結婚するときに、私がイスラム教で、相手がイスラム教ではないときは、政府としては認められません。結婚するときにどうするかというと、どちらかの宗教に入らないといけません。他の国についてはわかりませんが、1つの宗教に必ず属さないといけないというルールのあるインドネシアは、ちょっと独特なところだと思います。

インドネシアには、大きく分けて5つの宗教があります。一番多いのはイスラム教で、現在87%ほどです。その他は、キリスト教とカトリック教、仏教とヒンズー教です。そのほかだと、ほかの仏教を信仰しないといけないんですけれども、宗教によって、結婚のときや亡くなったときにどうするかというのが変わります。宗教以外には、民族の習慣などが違うので、同じ宗教でも死に対する考え方が違うこともあります。多分、イスラム教、キリスト教、カトリック教は、死んだ後に今度私たちが行く、来世という世界がありますが、天国か地獄が決められる前に審判の日があって、生きている間いい人であったならば天国に行き、悪い人であれば地獄に行くことになります。ムスリムとして、イスラム教徒としては、生まれてからが終活ではないかと最近になって思うようになりました。別の宗教では、生まれ変わる、例えば今の人生がいい人であれば亡くなって生まれ変わったらまた人間になれる、あるいは別の動物になる、ということを信じる人もいます。

### ③日本に住むインドネシア人の「終活」

現在、日本に住んでいるインドネシア人は、入管のデータで6万1千人ほどです。これは昨年の6月のデータですが、宗教的な違いもあるため、インドネシア人は意外とあまりいません。舘洞さんの話にあった愛知県でのデータを見て、急遽探してみたんですが、インドネシア人が日本で一番多い県は愛知県でした。今データを見たら、約6千人のインドネシア人がいます。6万1千人の65%ほどは技能実習生か留学生として日本に来ています。先ほどの人口のグラフから見ると、働き盛りのインドネシア人が多いので、私の周りでも終活について深く考える人はあまりいないかなと思います。

インドネシア人の死生観ですが、インドネシアにはビンネカ・トゥンガル・イカ（多様性の中の一体）という一句があります。インドネシアは多様性の中で統一されているので、インドネシア人はこうだよねと一言で終わらせないのがインドネシア人なんです。インドネシア人だから来られないね、インドネシア人だから辛い物が好きだよね、

ということもありません。宗教も違えば、民族も違い、それによって本人がどう生きたいかも変わるんですが、死生観についても、宗教と、民族と、本人がどうしたいかで変わります。

日本にいるインドネシア人については、大きく2つに分けたら、日本人の配偶者または家族をもつ人と、日本で働いている人または留学している人となります。日本で働いている人または留学している人は大体みんな若いです。技能実習生は若くて高校を出てすぐ18歳で来ている子がいっぱいいます。大体3年で終わるので、3年間日本に行ってまた国に戻るという感じです。留学も同じで例えば日本語学校に1年か2年通ったあと4年大学に入って帰っても6年間しかいません。大学院に進学したり博士号を取る人はもう少しいますが、まだまだ少ないです。

先ほどお話ししたようにインドネシア人は同じ宗教の人としか結婚できません。私もそうですが、日本人の配偶者または家族をもつ人は、結婚をするときにその条件として、私と同じ宗教になってくれますかということを話し合います。私の主人は結婚する1年前に改宗しましたが、それを主人の両親にも報告せずに、結婚するときに実はイスラム教になりました、とやっと報告しました。主人は日本人で長男なので、主人のご両親にもお墓をどうするかという話をしました。主人は2人兄弟なので、お墓を守ることなど弟に頼みますということを一言は話しましたが、それほど深く考えていなかったので、本当にそのときが来たらどうなるかはわかりません。私と主人と子どもたちが亡くなったら、イスラム教徒として、どこでもいいので埋葬してほしいということをお願いしました。

インドネシア人と結婚した日本人で結婚するために改宗した人もたくさんいます。実際にお葬式などの話をしましたか、と聞いてみたところ、した人としていない人がいました。話をした人の中には、別々にしますという家族もいれば、主人が日本人だから日本人風にお葬式をやりますという方がいました。子どもがインドネシア人なので、インドネシア人風に埋葬してほしいという人もいます。日本に住んでいるから、全部日本風にしたいという家族もいれば、2人とも所属する宗教のやり方でしたいという人もいます。日本で埋葬してほしいという人もいれば、亡くなった場所によってどこでもいいけれど埋葬してほしいという人、どうしても船でインドネシアに返して埋葬してほしいという人もいます。

ご主人が働くために日本に来ている家族の子どもが5月ぐらいに亡くなりました。この家族は今も日本にいますが、お葬式どうしますかという話になったときに、亡くなった子どもだけインドネシアに送りますという話で、なぜかと聞いたら、将来的にずっと日本に住むことはないからインドネシアに返すということでした。亡くなったらどうするかということについて、話し合いをした人もいれば、何も話さない人もいます。

日本で亡くなったらどうしますか、というとき、日本人の家族の場合、火葬してもらい日本のお墓に入る、日本で埋葬する、インドネシアに搬送してもらい埋葬する、民族によって、火葬をしたり、特定の場所に置いたりする人もいますが、それも、夫婦、家族での話し合いがメインです。仕事や留学の場合は、そのまま日本で埋葬されるか、インドネシアに送るかという選択肢があります。

私が愛知県に来て一番大変だと思ったのが、1人で日本に来て家族がいないところで亡くなった場合のことです。仕事で一人で日本に来ていたインドネシア人がおうちで亡くなって、3日後にやっと発見されました。警察へ行かないといけなかったのですが、警察から身寄りのいない人は原則、市が火葬してくれると言われました。ただ、その人はイスラム教だったので、日本で火葬されてもどうかと思い、ご家族に電話したら、どうしても返してほしいという話でした。しかし日本に身寄りがなくできなかったので、大使館に連絡して、大使館がご家族の許可をもらって、代わりに手続きをした、ということがありました。いろいろな事情で日本で亡くなった人がいるので、それも感慨深いことだなと思いました。

私は主人の仕事柄、全国転勤があるので、ムスリムとして終活を考えるとしたら、そのときが住んでいるところの近くのモスクに行くようにして、私のことを知っている人が増えれば何かあったときにお願いできるのではと思っています。近くのモスクへ行き、同じ国の人と繋がり、同じ宗教の人とも繋がり、ネットワークを広げることができます。私は、日本インドネシア家族勉強会の一員になっていますが、それもネットワークを広げるために始めたものです。

また、日本人の家族の理解を得るために、結婚するときに、こういう事情で私が亡くなったときにはこうしてくださいということを話しました。日本での葬式について情報収集をたくさんしました。私が結婚した当時は、山梨県にイスラム教の人を埋葬できるところがあり、1 人当たり 50 万円ぐらいしますという情報でした。ただ、日本ムスリム協会のメンバーになると半額でできると聞いて、協会に入りました。日本に来ているインドネシア人も増え、ムスリムが増えてきたので、最近は静岡県の清水市にイスラム教の人が使える墓地ができました。そちらも 50 万円ぐらいで、会員は 30 万円ぐらいで入れます。和歌山県にも墓地があることが最近分かり、そちらは 8 万円ぐらいで入れるという話です。

家族で死について話し合うことを私は考えましたが、もし周りにムスリムがいなかったら、せめて家族にだけでも伝えられたらと思い、重くは話しませんが、死んだらどうするとか、誰かに電話してねということを子どもに言っています。例えば、一番上の子に、私が死んだらおばあちゃんに電話してねと伝えています。この話をするとすごく泣きたくなりますが、それでも話をしないといけないと思っています。あまり準備していないですが、いつ死ぬか分からないので、終活としていろいろ準備をしないといけないと思っています。友達に聞いたら、死んだらこの貯金でやってくださいという人もいました。貯金はあるけれど、これは死の関係の貯金ということではなく、人に迷惑をかけないように死ねたらと思います。

最近、名古屋モスクが出した埋葬のお願い書ができました。コロナに感染したら、政府としては火葬をしないといけないという話のようですが、ムスリムとしては火葬されたら困るので、この証書をもらうと埋葬してもらえると教えてもらいました。コロナでなくても埋葬されたいと思ったら書いてくださいということだったので、とてもいいと思いました。私の場合は名古屋モスクですが、近くのモスクにこの証書を預けたら、何かあったときにモスクにこういう手紙が残っていることがわかるので、いいと思います。

私なりの課題ですが、死は遠いものだと思う人が多いと思います。まだ若いから死んだときのことを考えないという人もたくさんいますが、ただ、死は遠いようで身近です。いつ死ぬか分からないのが死です。突然来る、分からないものなので、このことをしっかり理解しないといけないと思います。日本で死を迎えることはお金がかかるものだということを知らない人が多いです。特に学生や留学生、実習生は知りません。また、来たときにまだ 18 歳の子に日本で死んだらどうするということを話しません。先ほど紹介があったパンフレットがあることにとても感動しました。インドネシア語はありませんでしたが、後で私もじっくり見ようと思っていました。お金がかかるということが分かっていなくて、イスラム教のインドネシア人が亡くなったときに、ネット拡散で「この人が亡くなったので、インドネシアに送るために募金をします」というものをよく見ますが、人に迷惑をかけなくていいならいいと思います。

最後に、課題としては、習慣の違いです。インドネシアで死を迎えると、自然に周りの人がいろいろ用意してくれるので、家族が亡くなった人は、大体何も準備しなくても何とかなります。あまりお金がなくても、募金など近所がやってくれます。ただ、これが日本ではうまくいきません。周りにインドネシア人がいるかどうかの問題ですが、日本にいると、自然に周りの人がやってくれるという考えは捨てないといけないとも思いました。

ムスリムは、できるだけ 24 時間以内に埋葬す

るのが望ましいとされるので、インドネシアではもう本当にぱぱっとやってしまいます。私が日本にいたときに父が亡くなりましたが、父が亡くなったのが夜だったので、もう次の朝には会いたいかどうかなど何も聞かれることなく、次の朝には埋葬されて終わりという感じでした。そのときは金曜日の夜だったので、私は帰りたくても帰れない状況でした。結果として、父が亡くなってから3日後にやっと帰ることができましたが、帰ったときにはもう何もありませんでした。ちょっと父が留守にしているという感じで、亡くなった実感もなく、今もまだいるものだと思うほどで、多分そっちのほうが私にはいいかなと思うぐらいです。日本で亡くなると、24時間以内の埋葬はなかなか難しいです。

他には、イスラム式の葬式ができるところがない、または少ないです。名古屋モスクは、亡くなったらイスラム式にお清めをして、布で包んで埋葬まで手伝ってはくれますが、特別に葬式を担当する人はいません。私も、ボランティアで女性の方の埋葬前の準備に入ったことがあります。名古屋モスクでは、「緊急の事態があったらお手伝いの連絡をしてもいいですか」という確認があり、私も参加しますということで一応伝えてあります。ただ、実際は、名古屋モスクにもお清めする場所が特別に設置されているわけではありません。家族でやるなら、家でお清めすればいいですが、その知識を持つ人も少ないので、どうしても他の人にお願いしないといけません。

家族のいない人が亡くなったときにはどうすればいいのか、インドネシアに返す手続きが分からないなど、困ることがあります。夫婦での話し合いができていなかったインドネシア人の奥さんが亡くなったときに、そのまま火葬されてしまい家族がとても悲しんだという話をたくさん聞きます。家族がいても自分が望むお葬式になっていなかったという人もいますが、家族がいない人が亡くなった場合についてはなおさら考えないといけないと思いました。

私はインドネシアの実習生の通訳もしていますので、仕事をするところにそういう話を入れたりすることはありますが、どうすればいいかというのを話せたら話しますが、実習生や仕事をしている人だったら会社に話をするということも、これからもますます積極的にしないといけないと思いました。

このような様々な課題がある中で終活をする私ですが、今後も皆さんの協力があったらいいなと思います。

## （3）中国の場合

王榮

### ①中国について

私は、中国の葬儀事情、そして、支援している帰国者の葬儀事情について、紹介します。

まず、大島さん、デウィさんのお話を聞いて、皆さん同じことを話しているなと思いました。

中国の地図はご承知の通り鶏の形です。西側がパキスタン、北側はロシアのハバロフスクです。東西の距離は領事館発表の数字では5200km、東西の時差は2時間以上あります。一番東側で太陽が燦々と照りつけているときに、西側の新疆ウイグルはまだ夜が明けていません。一番南は海南島、ベトナムのちょうど中部辺りに位置する島で、北はロシアに隣接する漠河（パクガ）です。南北の距離は5500kmです。南は中国のハワイと言われ、年中泳ぐことのできる熱帯で、北はずっと凍りついている、寒帯です。

大島さんからも、デウィさんからもあったように、地理的な条件によって時差と気候が中国国内でも異なり、非常に大きな差があります。当然、その差によって衣食住や文化も千差万別で、一言でくくれないのが中国です。例えば、食べ物の味つけは東西南北では違います。南は甘い、北は塩辛い、東は辛い、西はしょっぱいという感じです。例えば餃子は、中国の東北、華北の北京、天津辺りでよく食べられます。皆さんがよく食べる焼売は、実は長江より南の江南辺りでよく食べます。また、お酒についても、例えば日本の中華料理店

でよく飲まれる紹興酒は、東北ではあまり飲まれないです。江南のほうでよく飲まれます。東北の代表的なお酒は白酒（バイチュウ）で、国賓を接待するときによく出される茅台（マオタイ）は、貴州省や安徽省辺りが産地のお酒です。日本でも、九州が焼酎、東北が日本酒と、地方や地理条件、気候によって異なります。私が紹介するのは中国の一例です。かつて中国の東北のハルビンの田舎にいた時の経験と知識に基づいて紹介するので、これが全てではないことを理解していただいた上で、お話を聞いていただけたらと思います。

中国といっても、先ほど言ったように非常に広く、民族も多い。以下で紹介するのは、非常に昔の中国人の歴史的言い伝えというか、俗語といったようものです。「生在揚州（シュンザイヤンチョウ）」は、美しい揚州に生を受けて、「穿在蘇州（チュアンチャイスウチョウ）」、蘇州はシルクが有名です。きれいなシルク、蘇州のシルクの衣装を着て、「食在広州（シュウザイクァンチョウ）」、美味しい広州の料理を3度の食事にして、「住在杭州（チュウザイハンチョウ）」、豪華な杭州に住んで、これは昔の杭州が世界でも非常に豪華な都市とされていたからです。ここが今日のテーマに関連していますが、「死在柳州（スウチャイリュウチョウ）」、この柳州は木材の質が優れているので、死ぬときは柳州のお棺に入って、そして、「葬在徽州（ザンザイウエイチョウ）」、徽州は、風水的にいいと言われているところで、徽州にぜひ埋葬してほしいという古代の中国人としての生き死に方です。現代に通じるかというと、そうでない部分もありますが、私は、東北のハルビンという田舎に生まれ、17年間暮らしてきました。主にその村での葬式事情について、紹介したいと思います。

### ②中国での漢民族の葬儀

この写真は棺です。中国はもともと儒教を大事する国で、当然、親孝行に関しては、「孝（コウ）」や「忠（チュウ）」といったものを重んじる民族であり、死についても親の死に対してどれだけ親孝行なのか、そこにも表れます。こちらはちょっと小さなものですが、棺は本当にピンキリで、お金があっていい木材で全部木彫りにされるご家庭もあれば、普通の少し厚めの木材で作られている棺もあります。私の棺のイメージにぴったりな、黒や赤、濃い赤などのペンキで塗るのが、田舎の一般的なものです。何も塗っていない木目のままの棺もあります。やはり色を塗ってあるのが一般的ですが、身寄りのない方や、急死された方など、塗る時間がない、塗ってくれる家族がいないという方の棺は、何もされないまま棺として使われることが多いと思います。

中国の死生観、死に関しては、今も昔も怖い存在です。死という言葉を口にするな、不吉だと言われます。一方で、死に対して、きちんと見送っていくという考え方もあります。地域によって若干差があると思いますが、死にゆく人が穢れを持っているから、寝床にその人を死なせちゃいけないという風習が、特に田舎のほうでいまだにやはり強く残っています。中国の東北では、温突（オンドル）を普段使っているので、もうそろそろ息を引き取るだろうというときに、寿衣という死装束を着せてから、温突から床に敷いた板に亡くなりそうな人を移して、息を引き取るのを待つといいます。田舎では、近所で誰かがもう駄目らしいという話になると、近所の人たちが集まって最期を看取るのが一般的です。

亡くなると、寿衣、死装束を着せて、納棺して、田舎には葬儀屋さんは存在しないので、基本的に家族、親族、あるいは近所の方が集まって手伝ってくれることがほとんどです。葬儀は親族がすぐ駆けつけられるのであれば、親族が駆けつけられるのをある程度待ってから埋葬します。ただ、夏はやはり長い間置いておくわけにもいかないので、どうしても時間がかかるという場合には、待たずに埋葬するそうです。東北の冬は、天然の冷凍庫になるほどなので、場合によっては2、3日待ってから埋葬することもあります。

田舎の場合は、どなたかが亡くなると、まず招魂旗が玄関辺りに掲げられます。招魂旗というの

は、もともと道教の道士さんが使う、魂を招く道具です。2つの意味があり、1つは、亡くなってすぐにこれを使うことによって、亡くなった人の魂を呼び戻すことができるという言い伝えで、もう一つは、他所で亡くなった方の場合にその魂がきちんと故郷に帰られるようにするという意味合いを持っているそうです。

人が亡くなって納棺すると、弔問に来られた人が、あの世で使う銭を燃やすという習慣が中国にはあります。納棺したあと、広い家だと土間に、狭い家だと土間に置けないので、庭にちょっとした棚を作り、その棚の中にお棺を安置して、近所の方が弔問しに来ます。大体、その棺の前に、ろうそくや線香を立てて、もう少し手前に陶器の入れ物や器を置いてあの世で使うお金を燃やします。弔問に訪れる方も、あの世で使うお金を持ってきて、そこで燃やします。その間に、村外れの宗族の墓地や事前に申請して許可をもらった場所に埋葬するための墓穴を、家族や親族、近所の人たちで掘ります。

埋葬の準備ができると、喪主が招魂旗を担いで一番先頭を歩き、その後に親族たちが続きます。場合によっては、喪主のすぐ後ろにトラックに乗せた棺が来て、その後に親族たちが一緒に墓地まで歩いくという、俗に言う葬儀パレードが村で始まります。結構、村の人たちも出てきて、見送ってくださいます。

墓地で掘った墓穴に棺を安置して、喪主、親族から順に土を入れていきます。最後にみんなで土に埋めます。これは方正県（ホマサケン）にある、養父母（ヨウフウコウ）の墓です。コンクリートで固められていますが、田舎ではあまりコンクリートを使いません。普通に土を盛って、まんじゅう型になっています。

これが2016年の初冬に私が二十数年ぶりに生まれたところに行き、お墓参りした時の写真です。これが王家の墓地で、周りは畑、田んぼです。雪が降っていて分かりにくいですが、村の外れに王家の墓地があって、ここが1つのお墓で、これが祖先のお墓だそうです。この少しぽこっと盛り上がっているお墓は、亡くなった祖母のお墓です。遠いところに、もう1つぽこっと盛り上がっているところは、親族のお墓だそうです。これが、先ほど話をしたあの世で使う銭で、売店やスーパーでも売っています。これを燃やしながら、いろんなことをお話ししたりします。おばあちゃんのお墓へ行ったときには、このおばあちゃんは父の養母ですが、「今、おやじが要介護になって来られないから、孫の私が代わりにお墓参りしにきたんですよ」ということも、金を燃やしながら話をしました。

田舎の墓地は、村の外れの田んぼの真ん中にあることもあれば、空き地や丘にあることもあります。今は田舎でも基本的に火葬です。国が火葬を勧めていますから。都会では1950年代あたりから火葬が中心になっていましたが、人口の多くは田舎の農民なので、やはり土葬がまだ多かったです。30年ほど前にはほとんど土葬で、火葬は田舎では考えられないことでした。

私の母親は30代の半ばぐらいに脳梗塞で亡くなって、母親の死去によって日本に帰国することになりましたが、そのときに、1回埋めてからまた掘り起こして焼くことは結構大変なので、最初から火葬して、遺骨を日本に持って一緒に帰るということについて、なかなか母方のおじいちゃんの理解が得られず、一苦労しました。

2016年に、二十数年ぶりに東北へ行きましたが、滞在した僅か3日間に親戚のおばちゃんが亡くなりました。そのおばちゃんはどこに埋葬されるかなと思っていたら、今は埋葬がなく、火葬でした。近くの火葬場、近くといっても、2、3時間離れた火葬場に運んで火葬しました。遠くまで運んで火葬することに私は驚きました。田舎でもこの辺も変わってきたなと思いました。都会の場合はやはり火葬が主流なので、少し大きな町へ行くと、寿衣、死装束を売っているところ、あるいは先ほど大島さんの話もにあった骨壺を売っているお店やお花も売っているお店もあり、ある意味で専門の店も出てきています。

右の写真は霊柩車です。これで棺を運んでいま

す。中国の都会では、火葬して遺骨を公共墓地に3年間預けることができます。3年間そこに預けて、その後引き取って、墓地に土地を買い、そこに納骨するのが一般的です。そのため、骨つぼが火葬場でも販売されています。田舎の場合は、比較的派手な葬儀をしたりしますが、都会の葬儀は、シンプルなものになってきました。一般的に、有名な幹部や有名人は「追悼式」という形できちんとされますが、一般の場合には、都会にある葬儀屋さんが全てやってくれるようになっています。告別式では、こういう棺にご遺体を納棺して、お花がたくさん入れられますが、幹部が亡くなられたときなどは、中国の国旗がかけられたりします。この棺を二、三人ごとに回って、遺体に最後のご挨拶をしていきます。その儀式が終わったらそのまま火葬場に運ばれて、火葬されて、先ほどお話ししたこの骨つぼに入れて、火葬場の保管場に保管していくことになります。墓地は、各都市に大体1つか2つ、大きな共同墓地があり、北京には有名な八宝山革命公墓があります。中国の国家首脳が亡くなられたときに、ここに遺骨が納められます。中国の宗教は、特別な宗教もありますが、仏教が多くて、キリスト教とイスラム教も一定数います。個々の宗教によって、その宗教のしきたりに従って葬儀が行われるのが一般的で、私がお話ししたのは、あくまでも漢民族の葬儀の一般的な流れです。

### ③日本に住む中国帰国者の葬儀と「終活」

ここで、今、日本にいる中国帰国者の葬儀について、簡単に紹介させていただきます。葬儀そのものは、ほとんど日本のしきたりに従っています。普通に葬儀屋さんにお願いして、葬儀をやってもらっています。ただ、お墓参りについては、このあたりはわりと中国のしきたり、中国の風習で行われていることが多いです。中国のしきたり、風習というのは、あの世で使うお金を、中国国内では印刷したものが売っています。ほんとうに立派なお札と小切手で、これをお墓の前で燃やします。ただ、中国国内でも同様ですが、火事が多発しているので、一般的に禁止されています。共同墓地には、防火ができるような設備のある燃やすところがあり、そこで、このお金を燃やすようにしています。八事霊園に行くと、時々お墓の前の地面のコンクリートが黒くなっている場合があります。多くはないですが、いかにも誰かがお参りをしに来て、お金を燃やしたなということです。あとは、お供え物が中国の食べ物が多いという特徴もあります。

先ほど、デウィさんのお話にもありましたように、実際、帰国者の葬儀に関わる中で感じたのが、非常に日本のしきたりに沿っているが、葬儀に関する知識は不足しています。日本人でも、なかなか精通する人がいないので、当たり前と言えば当たり前かもしれませんが、帰国者の場合は葬儀に参加することも少ないので、葬儀に関する知識は非常に不足していて、誰かが亡くなったときにはあたふたしてしまいます。何をどうすればいいか分からないので、昔お世話になった帰国者の身元引受人や支援者に電話をかけて、どうしたらいいか聞いたり、お願いすることが多いです。

もう一つ、亡くなる前のターミナルケアです。特に重病人、あるいはがん患者のターミナルケアに関する知識と認識がすごく不足していて、その対応の仕方によって本人に様々な肉体的な負担や精神的な負担をかけてしまうというケースが見られます。また、葬儀そのものに関しては、事前に家族内で話し合いがされていなくて、葬儀のときや、お墓や納骨でいろんないざこざが発生したりします。

ここが帰国者というより中国人の特徴でもあると思いますが、遺骨を家にあまり置きたがりません。冒頭に、死は怖い存在という話をしましたが、その辺と関連するところもあると思います。例えば、16年ほど前に八事霊園に中国帰国者のためのお墓を作りました。その管理を私もしていますが、亡くなったときに、葬儀が終わったら八事で火葬しますと連絡が必ず入ります。火葬したらすぐにお墓に入れたいから、手続きをお願いしますということが結構多いです。私たちは専属でお墓

を管理しているのではなく、仕事をしながらなので、いつ葬儀かを事前に確認して、葬儀の日に合わせてお墓へ行って、納骨室を開けて、納骨できるように手配しないといけません。

中国の葬儀、帰国者の葬儀について、早口で紹介しましたが、今後こういった事情も踏まえて、いろいろと異文化「終活」を考えていかないといけないと思います。

（ディスカッションの内容は省略する。）